

## レールモントフの冷たい眠り

— 《Выхожу один я на дорогу...》をめぐって —

大月晶子

プーシキンが愛を歌った詩人であるとするならば、レールモントフは孤独の詩人であると言えよう。父方の先祖がスコットランド系であったといわれるレールモントフは、黒人を曾祖父に持ち、フランス的な教養を身につけたプーシキンが明るく華やかな作風を身上としていたのとは対照的に、北方的で暗鬱な激情を冷やかに突き放した歌い口で描き出している。

ここで取り上げようとしている詩の中には「眠り」「死」「墓」「冷たさ」「忘却」などがキーワードとして登場するが、レールモントフにおいて特徴的なことは、「冷たさ」に対する独特の感受性である(1)。また、この詩はレールモントフの創作活動の総決算としての意味合を持つものでもある(2)。以下、この「冷たさ」というイメージを中心に、レールモントフの生涯を通して一貫したテーマであった死と孤独について、最晩年に書かれた一篇の詩を手がかりに考察を進めてゆきたい。

### 1

Выхожу один я на дорогу;  
Сквозь туман кремнистый путь блестит.  
Ночь тиха. Пустыня внемлет богу,  
И звезда с звездою говорит.

В небесах торжественно и чудно!  
Спит земля в сиянье голубом...  
Что же мне так больно и так трудно?  
Жду ль чего? жалею ли о чем?

Уж не жду от жизни ничего я,  
И не жаль мне прошлого ничуть.  
Я ищу свободы и покоя!  
Я б хотел забыться и заснуть!

Но не тем холодным сном могилы...  
Я б желал навеки так заснуть,  
Чтоб в груди дремали жизни силы,  
Чтоб, дыша, вздымалась тихо грудь,

Чтоб, всю ночь, весь день мой слух лелея,  
Про любовь мне сладкий голос пел,  
Надо мной чтоб, вечно зеленея,  
Темный дуб склонялся и шумел. (3)

ひとりわたしが道に出れば 石くれ道がもやにきらめく  
夜はしずか 荒野は神の声に耳澄まし 星と星は語り交わす

天は厳かにも不可思議に 蒼い光に包まれて大地は眠る  
かくも辛く苦しいのは何故か 何を待ち何をか惜しむ

人の世に望むこととてもはやなく 惜しむ昔もありはせぬ  
自由とやすらぎさえあれば すべてを忘れて眠れたら

けれど冷たい墓の眠りでなく こんな眠りを眠りたい  
命の力が胸にまどろみ 息づいてしずかに胸が高まるような

夜も昼も耳を優しくなでながら

愛の歌を甘い声が歌うような

頭上には 変わらぬ緑の色をした

榿繁り 身をかたむけてざわめくような

作曲家チャーシナの親しみやすいメロディーに乗って、この詩はロシア全土に広まり、民謡化し、ロシア詩史上最も有名な作品の一つとなった。この詩が民謡化した原因としては、語句

の平明さ、口調の素朴さ、率直さなど、レールモントフ作品の文体的な特徴も考慮に入れるべきであろう。

この作品については既に多くの研究者が語っており、今回はマクシーモフ、ロミナーゼ、マコゴネンコのモノグラフをおもに参照したが<sup>(4)</sup>、特にマクシーモフの研究は出色のものであり、本小論もマクシーモフに多くを負っている。

本論にはいる前に、この詩のリズム、構成、語釈について簡単に触れておきたい。

まず、この詩のリズムはご覧のとおり5脚のハレイである。レールモントフは《Мцыри》において全編を男性韻で構成するなど韻律上の冒険を行った詩人であるが、この詩の5脚ハレイという形もロシア詩史上非常に希なものであった。この詩型は彼以前にはプーシキンもジュコフスキも用いておらず、レールモントフ自身もこの作品以外には《Утес》で用いたのみである<sup>(5)</sup>。この詩型についてマコゴネンコはプーシキンの『西スラヴの歌』に言及しつつ、スラヴ民衆歌謡、とりわけセルビアのそれとの関連性を強調している<sup>(6)</sup>。しかしながらマクシーモフは5連20行の全詩行にわたって冒頭に *анакруза* が存在し、全編 *анапест* の出だしになっており、3音節目のあとに *цезура* が来て、その後 *ямб* になっていること、多くの行が3アクセントになっていることを指摘した後に、これはドイツ、イギリスのアクセント詩の影響であろうと云っている<sup>(7)(8)</sup>。

構成の面から見ると、*на дорогу\_\_путь, жду ль чего\_\_уж не жду, я ищу\_\_я б хотел, заснуть\_\_сном\_\_так заснуть, всю ночь\_\_весь день* というような同種の単語の繰り返しや、問いと答えの形などが効果的に用いられており、こうしたことばの照り返し、反復が内容を次第に深め、美しい旋律を形成する要素になっている<sup>(9)</sup>。また、4連2行目から最終行までは構成的に単一の複文であって、3連目の後半から次第に高まってきた気分がピークに達している。この3連後半以降の部分全部がうたい手の願いの中味なのである。

さらにこの詩は円環形をなしていて、冒頭から2連2行目までと5連目の自然描写が、中心にあるうたい手の心情告白を包み込む形になっている。後に詳述することになるが、ここには夢の深化が見られる。すなわち2連目で自然が眠り込み、3連

目ではその中で眠り込んでしまいたいといううたい手の心がよまれている、夢が人と自然とにおいて二重になっているのである。

次に単語レベルで注意すべきこととして、дорога, чудно, пустыня の解釈について考えてみたい。дорогаを「旅」と訳すことがあるが、この単語は2行目の путь と対応しており、旅というよりはむしろロマン派的なニュアンスをこめた「道」の意味でとらえるべきであろう。尖った石の破片のきらめくもやにかすんだ夜道、つらく孤独な人生の象徴としての道がこの дорога なのだ。чудно についてはマクシーモフが述べているように、この時代では прекрасно, хорошо の意味ではなく、まさしく原義通りの「奇跡的な」という意味合において用いられている(10)。пустыняという語については、やはりマクシーモフが「砂漠の意味ではない」旨を述べているが、глас вопиющего в пустыне (荒野によばわる者の声：ヨハネ1・23) という成句にも見て取れるように、この語には宗教的なニュアンスが色濃く見られることに注意する必要がある。пустыня「荒野(あらの)」は、人が神と出会う場なのである。この荒野で星と星が語り交わしているが、《пророк》でも星や荒野は同様の役割を果している。

またこの詩はハイネの詩から影響を受けていると言われる(12)

## 2

ロミナーゼは、

И царствует в душе какой-то холод тайный,  
Когда огонь кипит в крови. (Дума)

を引用しつつ、レールモントフの詩情の底には тайный холод が常に流れているという(13)。そしてその冷たさは死から流れ込んでくるひそやかな冷たさなのである(14)。先に言及したように、この詩はハイネをもとにしてしているとされるが、ハイネの詩には、「生は焼け付く日中であり、死は涼やかな夜だ」とあ

る。そしてその生と死の間に眠りがあり、夢の中でナイチンゲールが愛のうたをうたっている。

レールモントフの詩情に一貫して流れている「冷たさ」は多義的である。この冷たさ、冷やかさの感覚は、甘美さや純粹、純潔、孤独、孤絶の感情、清澄さ、死の意識などを含んでいる。それは現実を超えた世界への渴望、憧れと結び付いており、同時に現実の猥雑さ、なまぬるさ、不潔さへの違和感、嫌悪感として認識される。それが時には冷酷、冷血さや、相互理解の不可能、断絶などといった形であらわになることもある。

ロミナーゼは неприкаянность という語を用いてこれを説明している(15)。この世のどこにも居場所がないこと、それがレールモントフの不幸なのだ。この世はレールモントフにとって常に冷たくよそよそしい。人生のとば口に立ったばかりのレールモントフは、\_\_\_\_\_ Я любил / Все обольщенья света, но не свет, / В котором я минутами лишь жил; (1831-го ИЮНЯ 11 ДНЯ) とうたった。同じ詩の中で Я холоден и горд と彼は言う。また、《Желание》(1831)では、Я здесь был рожден, но нездешний душой... とうたって、天から与えられたこの世の生に対する違和感を語る。32年の 《Для чего я не родился...》では、Для чего я не родился / Этой синею волной? とうたい出し、もしも青い海の波であったなら、銀色の月の光を浴びてざわめきながら、金色の砂に熱い口づけをし、頼りなげな丸木船を蔑んで、人々が誇りにする一切を破壊し、

И к моей студеной груди / Я б страдальцев прижимал; /  
Не страшился б муки ада, / Раем не был бы прельщен; /  
Беспокойство и прохлада / Были б вечный мой закон; /  
Не искал бы я забвенья / В дальнем северном краю; /  
Был бы волен от рожденья / Жить и кончить жизнь мою!

と言うのである。荒れ騒ぐ海のとらえどころのなさと冷たさとがレールモントフの身上であろう。同じ32年に書かれた

《Русалка》《Парус》にも青い波の冷たくとりとめのない魅惑が見事に表現されている。

これらレールモントフ初期の作品だけではなく、成熟期の作

品、たとえば《Когда волнуется желтеющая нива》(37)、《Кинжал》(38)、《Тучи》(40)などにも同質の冷たさへの志向が見られる。自由、永遠、純粹といった概念が、ここでは明確にひややかさと結び付いているのである。

また、ひややかさ、よそよそしさ、よるべのなさといった概念は「青」という色に結び付いている。《Выхожу один я на дорогу...》においても、大地は青い光に包まれて眠っている。青といえば、誰でも即座にノヴァーリスの『青い花』を思い浮かべるであろう。青は遥か彼方の手の届かない憧れの色、ロマン派の色なのである。

レールモントフの「青」という色の使い方は鮮やかである。голубой, синий, лазурный, лазоревыйといった単語の喚起するイメージのみずみずしさ、豊かさは《Парус》、《Русалка》《Тучи》、《Воздушный корабль》、《Для чего я не родился》などでも明らかであり、《Демон》にも感じられる。この憂鬱で神秘的な青のイメージは、ヴルーベリの絵を通してブロークへとつながってゆく。

さらに、レールモントフの作品の主人公たちの性格に一貫して見られる「冷たさ」がある。《Гость》(製作年代不詳)《Любовь мертвеца》(41)、《Русская песня》(30)や、戯曲《Маскарад》(35)の主人公たちは、情熱的というよりは、むしろ陰湿、執拗であって、自らの情熱が受け入れられない、あるいは裏切られたと思い込んだとたん、冷血、残忍で逆上した復讐鬼と化してしまう。共感や対話、相手に対する思いやりや想像力を欠いた、一方的で自己中心的な激情には暖かみというものが感じられない。これは当時流行していたゴシック・ロマンスの影響からだけでは説明しきれないレールモントフの個性の本質にかかわる問題であろう。

もうひとつ、《Выхожу один я на дорогу...》には「冷たい墓の眠り」という言い回しが出て来るが、「墓」のモチーフも1829年の《Молитва》にすでにあらわれ、31年の《1831-го ИЮНЯ 11 ДНЯ》から、40年の《Воздушный корабль》、41年の《Любовь мертвеца》と、生涯を通じて一貫して出て来るお気に入りのものであった。

ロミナーゼは、冷たさが死や永遠と結び付いているのに対し

て、ゆらめきが生の本質である変化、うつろいと結び付いていることを指摘している(17)。生成流転するものは常に裏切り、裏切られるものであり、そこにいのちのあたたかみというものはあっても変わらぬまことは存在しない。

《Когда волнуется желтеющая нива》の後半部分、

Когда студёный ключ играет по оврагу  
И, погружая мысль в какой-то смутный сон,  
Лепечет мне таинственную сагу  
Про мирный край, откуда мчится он, —

Тогда смиряется души моей тревога,  
Тогда расходятся морщины на челе, —  
И счастье я могу постигнуть на земле,  
И в небесах я вижу бога...

では、凍るように冷たい水が定かならぬ夢の中に思いを深く沈めて神秘的な物語をささやく時、うれいは消えて、地上には幸福を、天には神を見ろという。この水の冷たさはこの世のものならぬ不思議な夢の国とのつながりを示すものであり、そうした超越的で純粹、清浄な世界とのつながりが感じられた時にはじめて地上の幸福と神への信仰が可能になるというのである。

### 3

ギリシアの神話によれば、眠りと死は兄弟であり、ともに夜の子供である。

《Выхожу один я на дорогу..》を一読してまず感じるのは、眠りに関する言及の多さであろう。2連目で大地が青い光のうちに眠りにつき、3連後半のこの詩の中心をなす部分からは、われを忘れて眠りこんでしまいたい、というわたしの願いが語り出される。以下4連1行《сон》、2行《заснуть》、3行《дремать》と、「眠り」、「まどろみ」という意味の言葉が4行連続して出てくるのである。

夢、あるいは眠りは、レールモントフの作品の重要なテーマ

であるが、特に注目すべきは41年に書かれた《Сон》であろう。ダゲスタンの谷間で死の夢を見つつ眠る兵士、兵士の夢の中では彼の恋人が物悲しい夢に沈み込んでいる。そこで彼女は恋人、つまり兵士がダゲスタンの谷間で冷たい骸となっている光景を夢に見ていたのである。この詩は非常に不思議でもあれば不気味でもある。それは既に死んで骸となっている人間の見ている夢なのだから。

ここには夢の連鎖がある。鎖のように次々と夢のうちへ沈みこんでゆく催眠的な印象を読者に与えるのである。これはまさに《Выхожу один я на дорогу...》の眠りに共通するものである。

この「眠り」、「夢」ということに関連して、ハイネの《Ein Fichtenbaum steht einsam》のレールモントフの翻訳について考えてみたい。この詩はチュッチェフが1827年に翻訳しており、41年にはフェートとレールモントフがそれぞれ翻訳をあらわしている(18)。この詩の翻訳で最も有名となったのはいうまでもなくレールモントフである。彼の翻訳は文法上の性の問題からんで後に文法学者に関心を持たれることとなった。チュッチェフもフェートも恋愛のテーマを保つために Fichtenbaum を дуб、кедр などで置き換えているのに、レールモントフはそのまま сосна としたために、恋愛のテーマが全く別のものと化してしまったのである。何故レールモントフはこのようなことをしたのであるだろうか。

彼は、歳を重ねるにつれて次第に恋愛詩を書かなくなってきた。彼にとって恋愛は必ずしも最重要なテーマではないのである。マクシーモフは 《Выхожу один я на дорогу...》で語られる「愛」は、具体的な人、もの、土地に対するものであるよりは世界合一の原理、宇宙的エロスの感情であろうと云い、《 На севере диком стоит одиноко...》の詩もそのような文脈でとらえられるべきだとしている(19)。ハイネを知り抜いており、チュッチェフの翻訳を既に読んでいたことはたしかであろうとされているレールモントフのこの翻訳の意図は、恋愛ではなくむしろ孤独を中心テーマとして押し出すことだったろう。特に риза, пустыня という宗教的雰囲気を感じさせる単語はレールモントフしか用いていない。それは格調を高める効果



をも当然含んでいるが、それだけではない。ここにある感情は、恋ではなく神的、宗教的理念的な愛であろう。優美、流麗であるよりはむしろ、厳しく孤独で絶望的な夢の中へ沈み込んで行くロマン派的な「とらわれびと」のテーマが前面にあらわれてきている。遠くの恋人のことを思って眠る原詩の主人公は、あるべき幸福な自分の姿を夢みる人物へと変貌する。それは恋愛でも友情でも人とのつながりでもなく、また遥かなものへの憧れというよりはむしろ、もっと深い絶望的な孤独の意識を表現していると言えるであろう。

この夢は、ハイネの原詩の夢より深いレールモントフ的夢であり、また、レールモントフ的愛とは恋ではなく、絶望的な、理解を欠いた愛、《Пророк》に見られるような悲痛な愛の観念なのであるといえよう。

《Выхожу один я на дорогу...》で「わたし」の願う眠りについて、マクシーモフは《Русалка》や《Мцыри》に触れつつ、半生\_\_半夢\_\_半死のニルヴァーナの境地を示しているものだとするが(20)、マコゴネンコはこの立場を否定している(21)。

マコゴネンコはレールモントフをプーシキンの継承者としてとらえ、その詩情の底にフォークロア的要素を見いだすことを主眼として論をすすめている。そのため《Мцыри》の小さな金色の魚のモチーフは、民間信仰に源を発する「ルサールカ」モチーフの変形であって、もし「小さな金色の魚のうた」と

《Выхожу один я на дорогу...》の夢の内容に同質のものがあるとすれば、それは決して仏教的な「涅槃」などではなく、民間信仰に基づくものなのであるとする。マコゴネンコはこのほかにもレールモントフの死生観をロシア民衆の信仰のレベルで理解しようとするなどの試みを行っているが、どちらも無理があるように思われる。レールモントフがロシア・フォークロアに引かれ、そこから影響を受けていたとしても、だからといってそれ以外の可能性を否定する根拠は何もない。それに、「小さな魚のうた」はともかく、《Выхожу один я на дорогу...》には水のモチーフは皆無であるから、「ルサールカ」は問題にならない。また、「小さな魚のうた」が「ルサールカ」の変形だからといってそこに「涅槃」の思想を見いだしてはならないという理由もない。これら2つの可能性は二律背反

のものではないからである。

レールモントフの《Выхожу один я надорогу...》のうたい手は自由とやすらぎを求めるが、ロシアの田舎を見いだしたプーシキンと違って、レールモントフにはこの地上に安住の地を見いだすことはできなかった。彼は眠りを求める。それは幻想の世界への逃亡である。「小さな金色の魚のうた」や

《Русалка》に見られると全く同じナルコティックな甘く冷たい死の誘惑がここには見て取れる。

しかしパウラの言うように(23)、キーツやシェリーとは異なり、彼には死への憧れや自殺願望は存在していなかった。ソロヴィヨフはレールモントフのうちにニーチェとの同質性を見いだしていたが(24)、メレジコフスキーなど象徴派の世代の文学者にとってレールモントフは何よりもまず「悪魔的反逆者」であった。そのような見方が一面的であったことは言うまでもないが、しかしながらレールモントフが休息、まどろみ、死の誘惑に引かれつつも最後まで屈服しない徹底した反抗者であり続けたことは確かである。《Любовь мертвеца》に見るごとく、恋する死人は死後にまで地上の情熱を持ち込む。やすらぎ、静寂、調和のあるところが死なのだ。激情的な人間にとって死など恐くはない。彼にとっては生も死も同じことなのだ。それは妻に宛てて「生きることの大目的は興奮することのうちにあるのです」と書き送ったバイロンを髣髴とさせるものである(25)。

レールモントフのバイロニズムは《Нет, я не Байрон》(32)や《К...》(Не думай, чтоб я был достоин сожаленья...)(30)などに明瞭に見られるが、そこには幼い頃の熱狂というだけでは片付けられないものが含まれている。

#### 4

ユイスマンスの『さかしま』の主人公デ・ゼッサントは「いずこへなりとこの世の外へ」——any where out of the world——という表題のボードレールの散文詩を自室に飾っていたが(26)、レールモントフの《Выхожу один я на дорогу...》にもそうした夢幻の世界へ逃亡してしまいたいという願いが感じられる。ロミナーゼは、レールモントフの願いが、この世の絆に根付き

たいと同時に現実の桎梏から解き放たれたい、という相矛盾したものであると語っている(27)。この世で幸福でありたいと願ひ、かつ、この世を厭うて夢に溺れてゆく詩人の深い疲労と絶望感が《Выхожу один я на дорогу...》には漂っている。

То не был ангел-небожитель, / Ее божественный хранитель:  
Венец из радужных лучей / Не украшал его кудрей.  
То не был ада дух ужасный, / Порочный мученик\_\_ о нет!  
Он был похож на вечер ясный: /

ни день, ни ночь, \_\_ ни мрак, ни свет!...

長詩《Демон》においてタマーラの前にあらわれたデーモンの姿はこのようなものであった。レールモントフもまた天にも地にもなじめず、自然の中にも人々の中にもとけ込むことのない永遠の異邦人だったのである。

《Выхожу один я на дорогу...》が円環構造をなしていることは先に述べた通りであるが、ここではうたい手の苦しみは、自然の調和と厳かさのうちに包み込まれている。そしてこの詩の最後は Темный дуб склонялся и шумел. と結ばれている。櫨の木は、男性的な永遠と不動のシンボルである。

荒野では星々が語り交わし、神の声があまねく響きわたる。大地は耳を澄まし、眠り、息づいている。そして神の栄光を示す、永遠の理想の世界をかいまみるとば口として自然は認識されている。こうした調和の神秘、世界との融合が、レールモントフ的愛の観念であり、そこに愛そのものである神の世界の宇宙的エロスがあきらかにされる。けれど調和と一致は幻想にすぎない。ここには止揚は存在しない。自然は莊嚴であり、天には神がしろしめし、地には幸福と安らぎが見いだせるとしても、それは永遠にレールモントフのものではなかったのだ。

#### 注

- 1) Эткинд.Е.Г. *Разговор о стихах*. М., 1970. С.37\_39
- 2) *Лермонтовская энциклопедия*. М., Л., 1964. С.95

3) Лермонтов М.Ю. *Полн. соб. стих. в 2-х т.* Л., 1989.

以下レールモントフの引用はすべてこの版による

4) Максимов. Д.Е. "О двух стихотворениях Лермонтова" в  
кн. *Русская классическая литература : Разборы и  
анализы* М., 1969. С.127\_147

Ломинадзе.С.: "Тайный холод" В.Л. 1977. №3

Макогоненко.Г.П. "《Выхожу один я на дорогу...》" в  
кн. *Лермонтов и Пушкин.* Л., 1987. С.318\_356

以下この三者の著作の引用はページ数のみを示す

5) Максимов С.137

6) Макогоненко С.353\_355

7) Максимов С.137

8) ロトマンはチュッチェフのデニーシエヴァ連作詩のうちの  
《Накануне годовщины 4 августа 1864г.》を分析した際に、  
この詩がチュッチェフ作品中唯一の5脚ハレイであり、内  
容、形式ともにレールモントフの《Выхожу один я на  
дорогу...》に直接影響を受けていることを、タラノフス  
キを引用しつつ示している。

Лотман.Ю.М. *Анализ поэтического текста.* Л., 1972.  
С.191\_196

9) Максимов С.137\_8

10) Максимов С.131

11) Максимов С.130

12) ハイネの詩は次の通り

Der Tod, das ist die kühle Nacht,  
Das Leben ist der schwüle Tag.  
Es dunkelt schon, mich schläfert,  
Der Tag hat mich müd gemacht.

Über mein Bett erhebt sich ein Baum,  
Drin singt die junge Nachtigall;  
Sie singt von lauter Liebe,  
Ich hör es sogar im Traum.

(Reclam文庫.1980)

なおこの詩にはチュッチェフによる自由訳がある

### Мотив Гейне

Если смерть есть ночь, если жизнь есть день, \_\_\_  
Ах, умаял он, пестрый день, меня!...  
И сгущается надо мною тень,  
Ко сну клонится голова моя\_\_\_

Обессиленный, отдаюсь ему...  
Но все грезится сквозь немую тьму,  
Где-то там, над ней, ясный день блестит,  
И незримый хор о любви гремит...

(1868\_69)

(Тютчев.Ф.И. Полн. соб. стих. М., Л., 1934.)

13) Ломинадзе С.211

14) Ломинадзе С.224\_5

15) Ломинадзе С.226

16) レールモントフの創作活動が、成熟するにつれてテーマ内容の変化を伴うものではなく、むしろ生涯一貫して愛、自由、自然、神、地上的生への絶望と天上への憧れといった同一のテーマを追求し続け、それを深化、発展させていったものであるとする立場を、出かず子氏は採っている。

「レールモントフのバラード〈タマーラ〉」スラヴ研究  
第23号 pp.64-68

17) Ломинадзе С.224\_225

18)

Ein Fichtenbaum steht einsam  
Im Norden auf Kahler Höh'.  
Ihn schläfert; mit weißer Decke  
Umhüllen ihn Eis und Schnee.

Er träumt von einer Palme,  
Die, fern im Morgenland  
Einsam und schweigend trauert  
Auf brennender Felsenwand.

(Heine *Reclam*)

На севере диком стоит одиноко  
На голой вершине сосна  
И дремлет, качаясь, и снегом сыпучим  
Одета, как ризой, она.

И снится ей всё, что в пустыне далекой,  
В том крае, где солнца восход,  
Одна и грустна, на утесе горячем  
Прекрасная пальма растет.

(Лермонтов)

### С чужой стороны

(Из Гейне)

На севере мрачном, на дикой скале,  
Кедр одинокий под снегом белеет,  
И сладко заснул он в инистой мгле,  
И сон его буря лелеет.

Про юную пальму снится ему,  
Что в краю отдаленном Востока  
Под мирной лазурью, на светлом холму  
Стоит и растет, одинока\_\_

(Тютчев. Ф. И. *Полн. соб. стих.* М., Л., 1934)

На севере дуб одинокий  
Стоит на пригорке крутом;  
Он дремлет, сурово покрытый

И снежным, и ледяным ковром.

Во сне ему видится пальма,  
В далекой восточной стране,  
В безмолвной, глубокой печали,  
Одна, на горячей скале.

(Фет. А. А. *Стихотворения и поэмы* Л., 1986)

- 19) Максимов С. 136
- 20) Максимов С. 138
- 21) Макогоненко С. 327
- 22) Макогоненко С. 340
- 23) Bowra. M. "Lermontov," *Oxford slavonic papers* 1952  
v. 3. p. 18
- 24) Соловьев. В. С. "Лермонтов," в кн. *Владимир Соловьев;  
Стихотворения, эстетика, литературная критика*  
М., 1990. С. 441
- 25) マリオ・プラーツ : 肉体と死と悪魔 倉智恒夫他訳  
国書刊行会 1986. pp. 125-126
- 26) ユイスマンス : さかしま 渋谷龍彦訳 桃源社 s. 52.  
p. 25
- 27) Ломинадзе С. 226